福島県いわき市平に建つ 「旧釜屋」の建築的特性について

SOME ARCHITECTURAL CHARACTERISTICS OF THE FORMER KAMAYA BUILDING IN TAIRA, IWAKI-CITY, FUKUSHIMA- PREFECTURE

大橋竜太 —— * 1

キーワード:

釜屋, 三森寅吉, 土蔵造, 耐火レンガ, 小屋組, 和洋構法の併用

Keywords:

Kamaya, Torakichi Mimori, Dozo-zukuri, Fire Refractory Brick, Timber Roof, Blending of Japanese and Western Construction

Ryuta OHASHI —— * 1

The purpose of this paper is to report the survey of the former Kamaya Building in Taira, Iwaki-City, Fukushima-Prefecture. This building is consisted of three main parts, Mise-gura, Sode-gura, the stone façade construction between them. Mise-gura is traditional Dozo-zukuri construction. Sode-gura is built of fire refractory brick. And the stone façade construction is designed by western style. Basically this building is built by traditional way, but a lot of new techniques are used within. In this paper, I discuss the architectural characteristics of this building.

1. はじめに

福島県いわき市平は、旧磐城平藩の城下町として栄え、江戸期にはすでに町並みの骨格が形成されていた。旧釜屋が位置する本町通りは、その東西の目抜き通りとして栄えた。明治維新の混乱期に平城は焼失したが、城下はかろうじて残った。しかし、明治 39 (1906) 年 2 月 18 日に起こった大火によって、市内の三分の二が焦土と化し、焼失家屋 320 戸、被害総額 200 万円とも言われる甚大な被害に見舞われる¹。そして、その直後、まちの再建が開始され、防火対策として土蔵造の町屋が建てられるようになった。当時の建築の多くは、無計画とも思える昨今の乱開発によって失われてしまったが、それらのなかで、もっとも大規模で、もっとも精巧につくられた町屋が、旧釜屋である²。この建築も、平成 14 (2002) 年 2 月 1 日に所有元の釜屋 (諸橋金物株式会社) が倒産し、存続が危ぶまれた。しかし、幸運なことにも、この建築の歴史的および建築的価値に理解を示す新オーナー (松崎博光氏) があらわれ、保存・再生の方針が固まった。本稿は、この建築の実測調査を行ない³、その建築的特徴を報告するとともに、建築的価値を論ずるものである。

2. 釜屋について

「釜屋」は、元禄 13 (1700) 年頃、平藩主の鋳物師の家系である諸橋家を継いだ初代久太郎によって創業され、その後、鍋、釜などの金物類の販売を行ない、地元の名士に成長していった。特に、四代久太郎 (1863-1930) は商才に長け、事業を拡大していった。その四代久太郎が当主にあった明治 39 年、平の大火が発生した。

みずからの店舗および居宅も焼失してしまうが、その際、久太郎は木材を除いた建築用材 (建築金物、その他建築材料等) を仕入れ、販売するルートを築き、商売を軌道に乗せるとともに⁴、平の復興に尽力し、地元住民からの信頼も得た。

大火の際、木羽葺きの旧店舗等、諸建築は瞬間に燃え尽きたとい⁵、それを教訓として、土蔵造の店蔵、続いて耐火レンガ造の袖蔵が建てられ、その後、両者は洋風の石張り建築でつながれた。他方、居住用施設として、店蔵・袖蔵の建設直後、店蔵裏の 2 間ほど離れた位置に木造の家屋が独立して建てられ、昭和 2 (1927) 年には、さらに奥に数寄屋造の居宅 (「隠居」と呼ばれていた) が建設された⁶。その後も増改築を繰り返し、少しずつ規模を拡大していった。戦時中にあっても戦災をほとんど受けることなく、往時の姿をよく保っていたが、平成元 (1989) 年 11 月 5 日の早朝に発生した火災によって店蔵裏の木造家屋が焼失し、さらに平成 14 (2002) 年の倒産により、土地・建物は破産管財人の手に渡った。その後、奥の隠居等、敷地内の建物のほとんどは、マンション建設のために取り壊されてしまったが、本町通り側の店蔵 (増築部分を含む)、袖蔵、両者をつなぐ石張り建築は、かろうじて残された⁷。

3. 現存する釜屋の建築について

本町通りに面して、土蔵造の店蔵が建ち、その西側に耐火レンガ造の袖蔵が建っている。両者は、洋風のデザインの石張り建築によって連結されている。また、店蔵および石張り建築の裏には、RC 造二階建の作業用建築がある⁸ [写真 1] [図 1~12]。

*1 東京家政学院大学家政学部住居学科 助教授・博士 (工学)
(〒194-0292 東京都町田市相原町2600)

*1 Assoc. Prof., Dept. of Housing & Planning, Faculty of Home Economics,
Tokyo Kasei Gakuin University, Dr. Eng.

写真 1 : 現存建物正面 (本町通り側)

図 1 : 一階平面図 (1 : 300)

図 2 : 二階平面図 (1 : 300)

<店蔵>

土蔵造、桁行 9,999mm、梁間 7,222mm、二階建、切妻造、正面庇付、棧瓦葺の北面を正面とする建築である。「家主五代諸橋久太郎 明治四拾老年七月廿五日新築 大工棟梁三森寅吉」と記された棟札が残り、平の大火の二年後の明治 41 (1908) 年に、三森寅吉によって建設されたことがわかる⁹。正面一階には奥行一間半 (2,802mm) の庇がつく。前面は両側に半間の壁をもつ以外は開け放し (現状はサッシュとシャッター) となり、東側と南側にはともに鉄製の観音扉をもつ出入口が、南壁東側には明り採り窓 (鉄製観音扉付) がある。西側は現状ではすべて壁が取り除かれ、棟筋の柱一本のみで、コン

図 3 : A-A' 断面図 (1 : 300)

図 4 : B-B' 断面図 (1 : 300)

クリートで補強されている。モヤと庇の境には 860×300mm、軒通り (中央部) には 600×300mm という大断面の間口 4 間を貫くヒノキ材の横材 (数梁・数桁) が用いられている。床は板張り (一部新建材) になっているが、その下 210mm の位置にかつての土間が確認でき、前面道路が舗装工事により上昇した際、土間から板張りに替えられたものと推測される。二階は正面に 3 つの観音扉がある以外、東・南・西側はすべて壁で、半間ピッチで間柱が入られている。この建築は明治期に流行した土蔵造であるが、土壁には漆喰の代わりにセメント・モルタルが用いられ、正面外壁は銅版で覆われ、小屋組には和小屋と洋小屋 (トラス) が併用されるなど、伝統的な構法と新構法の併用が、いたるところで見ることができる。

<袖蔵>

耐火レンガ造、桁行 (内法) 7,900mm、梁間 (内法) 4,370mm、切妻造、二階建、棧瓦葺の建築である。北側の本町通りに対して妻入に配置されているが、出入口は敷地内の南面に設けられている。「明治四拾四年七月七日棟上ス 大工棟梁三森寅吉」と記された棟札が残り、明治 44 (1911) 年に店蔵同様、三森寅吉によって建設されたことがわかる。一階南側に鉄製の観音扉をもつ出入口があり、東壁と北壁には鉄製の観音扉の開口がある。床下階があり、南・北壁には小さな換気口が設けられている。二階は南壁と北壁に鉄製の観音扉をもつ開口があり、それ以外の壁はセメント・モルタルで化粧塗されている。レンガはすべてイギリス積みで、目地の仕上げをなまこ状にした (覆輪目地)、丁寧な仕事である。小屋組は、店蔵同様に、和洋が併用された構法となっている。

<石張り建築>

店蔵と袖蔵の間は、洋風のデザインの石張り建築でつながれている。現状では、RC 造二階建となっているが、少なくとも構造体は当初のものではない。一階部分は店蔵との間が開け放しとされ、

270mm ほど高くなっていて、西側は袖蔵の外壁がそのまま間仕切となり、観音扉が残っている。二階は新建材が多く、最近の仕事と思われる。北壁は石張りとなっているが、この部分と現在の建物の間は新建材によって覆われていて、詳細は不明である。

<RC 造作業用建築>

店蔵裏には、作業用空間として用いられていた RC 造二階建の増築部分がある。開口部等は新しいものの、一階開口部上部には当初と思われるテラコッタ装飾が残っており、石張り建築より早い時期に建てられたものと思われる。

図 5：北立面図 (1:500)

図 6：東立面図 (1:500)

図 7：南立面図 (1:500)

図 8：西立面図 (1:500)

4. 建設の経緯について

棟札によると、店蔵は明治 41 年、袖蔵はその三年後の明治 44 年に完成している。これら二つの蔵は、当初、それぞれ独立して建てられたものと考えられる。二つの蔵の間には、現在、石張りの RC 造建築があるが、袖蔵の東側には基壇がまわされ、また、観音扉が残ることから、少なくとも袖蔵が完成した段階では、この部分は外部空間であった可能性が高い。現在、店蔵との間の壁は、すべて取り除かれているが、この部分には店蔵の基壇に設けられていた石積みがある。石張りの建築の建設年代は不明であるが、少なくとも昭和 9 (1934) 年に撮影された写真には、現在の外観が確認できる¹⁰。大正初期に、平市内で洋風建築が流行しており¹¹、この頃に建設された可能性が高い。ただし、現在の構造体は明らかに新しく、当初からのものではない。大正期には吹きさらしの空間か、あっても簡単な構造体にすぎなかったと思われる。床下には、かつての土間が確認でき、コンクリートで補強された壁の内側に、床を支える束が設けられており、ファサードの壁一枚を残して、その内側のみが改造されたと考えるのが妥当であろう。店蔵裏(南)側には、RC 造の作業用建築がある。ここでは一部にレンガが用いられているが、袖蔵と比較してディテールが雑で、明らかにのちの増築とわかる。しかし、現在の石張りの建築よりは、早い時期のものと思われる。開口部上部のテラコッタ装飾等、洋風のデザインも確認でき、石張りのファサードが建設された時期までさかのぼることができるかもしれない。今回の調査では、これ以上の建設の経緯は明らかにできなかったが、建物間の取り付け方等をさらに検討することで、より詳細が明らかになるとと思われる。

5. 小屋組について

店蔵ならびに袖蔵の小屋組は、伝統的な構法ではなく、和小屋と洋小屋の併用であり、この建築のひとつの特徴となっている。

店蔵の小屋組は 5 組の合掌からなり、両端(妻壁)は和小屋[図 9]であるが、中間の 3 組は洋小屋[図 10]となっている。洋小屋は、ろく梁、真束、方杖からなるキング・ポスト・トラスを、合わせ梁で桁行方向を補強したもので、当時の洋風小屋組の典型的な形状である。ただし、妻壁の和小屋の小屋梁とトラスのろく梁の高さが異なり、また、左右の軒桁(敷桁)の高さも異なっているため、小屋梁とろく梁をつなぐ補強材が斜めになるなど、特異なおさまりを生んでいる。小屋組に用いられた材は十分に太いにもかかわらず、火打梁などの補強材や金物が多用されているのが特徴的である。

袖蔵でも同様に、和小屋と洋小屋の併用となっている。ここでも店蔵と同様に、両端(妻壁)の合掌のみが和小屋[図 11]となり、中間の 2 組の合掌はトラス[図 12]となっている。ここでは垂木は用いられず、母屋が直接、野地板を支えている。

図 9：店蔵の和小屋

図 10：店蔵のトラス

図 11：袖蔵の和小屋

図 12：袖蔵のトラス

6. 大工棟梁・三森寅吉および巳代松について

店蔵ならびに袖蔵は、三森寅吉 (1855 頃-?) の手による。三森家は、釜屋のいわゆる「おかえ大工」であり、その関係は娘婿の巳代松 (1880-1954) の時代まで続いたとされ、おそらくその後の増改築にも三森家が関わっていたものと思われる。寅吉は地元では名の知れた大工棟梁で¹²、伝統的な手法を使いこなす職人であった。それに加え、さまざまな新技術も修得していた。大火の前後には、地元の政治家であり実業家であった白井遠平 (1846-1927)¹³ の依頼を受け、好間炭鉱 (明治 39 年 10 月 1 日創業) と同火力発電所 (明治 40 年 5 月 1 日新設) の新築工事に携わっており¹⁴、これら中央との関係が深かった白井の仕事を通して、新しいタイプの建築にふれ、最先端の技術を身につけたものと思われる。白井が創設した磐城銀行の大正 3 (1914) 年に完成された新店舗は、いわき地方を代表する洋風建築であったが¹⁵、その外観のデザインは釜屋の建築の洋風部分と似ており、両者ともに三森家が関わっていた可能性が高い。

7. 施主諸橋久太郎の家業と建築への影響について

釜屋は、いわき地方で建築材料の卸・販売を一手に手がけていた商家であり、その影響が建築にもあらわれている。たとえば、店蔵外壁は銅版で巻かれ、開口部には鉄格子と鉄扉が用いられ、小屋組等にも補強金物が用いられるなど、自社で取り扱っていた商品をふ

んだんに使用している。店蔵ならびに袖蔵の内部では、通常は漆喰が塗られるような部分にセメント・モルタルが用いられているが、それにも家業が影響しているものと思われる。いわき地方では、石灰石が豊富に採れ、その後、セメント製造が主産業に成長していく。そのきっかけとなったのは、諸橋久太郎が銅山の採掘現場で廃石扱いをされていた石灰石からセメントを製造しようと中央資本を誘致したことであり、久太郎の尽力で、明治 40 (1907) 年には磐城セメント (株) が創設され、翌年には四倉工場が操業を開始している¹⁶。工場の操業開始と店蔵の竣工は前後を逆とするが、釜屋の建築に漆喰ではなくセメントが使用されたことに、このことが影響していた可能性が高い。耐火レンガの使用もまた、地場産業と密接な関係があると思われる。いわき地区は粘土が豊富に産出されることに加え、近隣に炭坑が多くあるため熱源にも困らず、耐火煉瓦工場が多数建てられた。わが国で初めて民間で耐火レンガ製造を開始した品川白煉瓦 (西村勝三創業) は、明治 28 (1895) 年に小名浜に工場を建設しており、平でも明治 27 (1894) 年に丸平耐火煉瓦工場 (明治 33 年に磐城耐火煉瓦と改称、その後日本窒業磐城工場となる) が創業し、明治 31 (1898) 年創設の日本耐火煉瓦は、明治 39 (1906) 年に本工場を平に開設している¹⁷。いわき地方の建築資材の卸・販売を生業とする釜屋が、こういった地場の新材料を、率先して取り入れたのは当然のことだろう。

8. 東郷ハガネ本舗 (河合鋼商店) との関係について

金物卸を生業としていた久太郎は、東京や大阪の取引先を頻繁に訪ねたという。特に、東京日本橋の「東郷ハガネ本舗」の主人・河合佐兵衛を信奉しており、東郷ハガネ本舗を手本に釜屋を建てたと言われている¹⁸。東郷ハガネ本舗 (河合鋼商店)¹⁹の当時の建物は現存しないが、社史²⁰によると、明治 35 (1902) 年に蔵造りの店蔵が建てられ[写真 2]、その後、明治 43 (1910) 年に洋風の建築が増築されている[写真 3]。この蔵造りと洋風建築の増築という構成は、釜屋の構成と一致する。ただし、釜屋がレンガ造で袖蔵を増築した際、すでに河合鋼商店では洋風建築の増築を行っており、釜屋が直接的に河合鋼商店に追従したわけではなく、手本として、ある程度距離を置きながら影響を受けたものと思われる。

写真 2: 東郷ハガネ本舗²¹
(東京日本橋、明治 35 年建設)

写真 3: 東郷ハガネ本舗²²
(明治 43 年増築)

9. まとめ

釜屋は、明治末の大火後の再開発時にあって、伝統的な防火技術である土蔵造に、耐火レンガ造という新しい防火技術を組み合わせで建てられた。デザインの面でも、土蔵造の伝統的な外観に、耐火

レンガの化粧積みや洋風の石張りファサードといった新しい要素が組み合わせられている。ディテールでも同様の現象が確認でき、伝統的手法をもとにさまざまな先端手法を加えた点が、この建築の最大の特徴となっている。また、ふんだんに地場産業の産物を取り入れている点も、もうひとつの特徴と言えよう。このように、旧釜屋の建築は、いわき地方における近代建築の発展過程を考察する上で、貴重な事例のひとつである。建設からもうすぐ 100 年の歳月が経とうとする現在、旧釜屋は文化財として保存し、後世に伝えていくための万全の努力が払われるべきであろう。

【註と参考文献】

- 1) 斉藤伊知郎: いわき商業風土記, 坂本紙店, 1973 年, p.152
全焼家屋 566 戸、見積被害額 2,010,000 円としている文献もある (荒川禎三編: 磐城百年史, マルトモ書店, 1966 年, pp.285-288)。
- 2) 旧釜屋に関しては、『日本近代建築総覧』(日本建築学会編, 技術堂出版, 1980 年) に掲載されているものの、この建築を取り上げた研究等はほとんどない。また、『日本近代建築総覧』では、建設年を明治 42 年、設計者を三森巳代松としているが、本報告では、棟札の記載にしたがい店蔵は明治 41 年建設、袖蔵は明治 44 年建設、設計者は三森寅吉とした。
- 3) 実測調査は、平成 17 (2005) 年 3 月 7～9 日に実施した。
- 4) 斉藤伊知郎: いわき商業風土記, p.22
- 5) 大火以前の建物に関しては不明だが、唯一の痕跡として、明治 27 年製造の銘がある天水釜 (釜屋製造) が店蔵正面に設置されている。
- 6) 昭和 2 年建設の隠居は、平成 16 年に取り壊されてしまったが、今井速水編『いわきの文化財』(いわき文化財出版会, 1973 年, pp.202-213) に数枚の写真が掲載されている。
- 7) 釜屋の歴史に関しては、『特集 釜屋物語』(日々の新聞第 37 号、2004 年 9 月 15 日, pp.6-7) を参照した。
- 8) それぞれの建物の呼称に関しては、前所有者等に関き取り調査を実施することができなかったため、便宜上、筆者が命名した。
- 9) 棟札では家主を五代としているが、明治 41 年には四代久太郎が家主である。当時、五代久太郎はまだ幼く、誤記と思われる。
- 10) 猪狩四郎監修, 斉藤伊知郎編: 写真 磐城百年史 (1957 版), 平経済倶楽部, 1957 年, p.34
- 11) 磐城銀行、平銀行、七十七銀行、磐越銀行などが、大正時代に建てられた洋風建築としてあげられる (いわき市史編纂委員会編: いわき市史・第六巻, 1977 年, pp.730-743、および、斉藤伊知郎編: ふるさとの思い出写真集 明治・大正・昭和 平, 国書刊行会, 1980 年, pp.100-105)。
- 12) 寅吉は、一代で 1,000 軒の建築を手がけた大棟梁とあがめられ、地元では「千軒大工」と呼ばれていた。大火後は、釜屋の他にも市内に、松崎商店、諸橋呉服店、大一屋、横山商店、芦沢材木店といった土蔵造の町屋を建てている (斉藤伊知郎: いわき商業風土記, p.23)。
- 13) 白井遠平は、磐城・磐前・菊多の郡長などの官職に従事し、その後、衆議院議員となるとともに、実業家としても活躍した。磐城炭鉱 (株)、入山炭炭の経営に関わり、その後、好間炭鉱を設立し、採掘した石炭の運搬のために日本鉄道海岸線 (現 JR 常磐線) の敷設に尽力した。他にも磐城銀行を創設するなど、近代いわきの産業振興に大きな足跡を残した (里見庫男監修: 図説いわきの歴史, 郷土出版社, 1999 年, p.242)。
- 14) 斉藤伊知郎: いわき商業風土記, p.184
- 15) 斉藤伊知郎: いわき商業風土記, pp.204-205、および、斉藤伊知郎: ふるさとの思い出写真集, pp.100-105
- 16) 荒川禎三編: 磐城百年史, p.303、および、斉藤伊知郎: いわき商業風土記, p.121
- 17) 「品川白煉瓦百年祭を目前に 耐火レンガといわき」(斉藤伊知郎: いわき商業風土記, pp.122-124)、および、荒川禎三編: 磐城百年史, p.304、および、いわき地域学会編: 新しいいわきの歴史, いわき地域学会出版部, 1991 年, pp.216-217
- 18) 斉藤伊知郎: 諸橋元三郎—その人間と周辺, 1979 年, p.66
- 19) 通称東郷ハガネ本舗は、明治 4 年に「井阪屋中興」として創業し、明治 39 年から商標として「東郷ハガネ」を用いるようになり、同時に「河合洋鋼商店」と改称し、さらに明治 43 年に「河合鋼商店」と改称している。昭和 13 年に組織変更し、「株式会社河合鋼鉄」となった。
- 20) 水野喜之編: 河合鋼鉄 111 年のあゆみ, 河合鋼鉄, 1983 年
- 21) 中山安太郎: 東京模範商工品録, 東京模範商工品録編纂所, 明治 40 年, p.55
- 22) 水野喜之編: 河合鋼鉄 111 年のあゆみ, p.36

なお、本稿に使用した図面は、所有者の松崎博光氏が平成 16 年の取得後に改修計画のために地元の工務店に作成を依頼した平面図ならびに立面図をもとに、実測調査の結果を反映させ、東京家政学院大学卒業生・宇都光恵氏の協力のもと、リライトしたものである。

【2005 年 4 月 20 日原稿受理 2005 年 7 月 22 日採用決定】